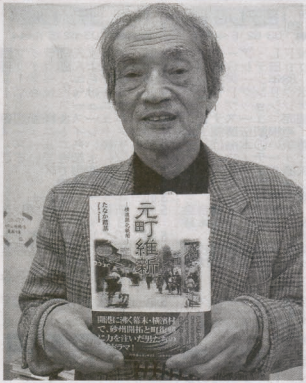
館林の元侠客主人公に新作

埼玉在住作家が時代小説

横浜・元町舞台に明治の激動描く

群馬にまつわる時代小説を執筆している作家・たなか踏基さん（69）（埼玉県上尾市）が、新作「元町維新―横濱開化秘聞」（幻冬舎ルネッサンス刊）を出版した。横浜・元町が舞台で、主人公は上州館林出身の元侠客。ペリー来航から明治の激動期に、寒村だった横浜が世界に開かれた港町へ変貌していく姿を描いた。



新作を紹介するたなかさん

主人公の佐吉は刃傷沙汰を起こし、故郷を出奔する。やがて名を次郎左衛門に改め、横浜へ。新田開拓や運河開削などの土木事業を次々と手がけていく。気っぷの良さや人望の厚さも相まって、江戸後期の上州を代表する侠客・国定忠治を思い起こさせる。

「開港後の横浜には、絹取引の関係で多くの上州商人が訪れている。佐吉のような人物がいても不思議ではない」とたなかさん。横浜で活躍したフランス人実業家アルフレッド・ジェラールや、群馬とゆかりの深い幕臣・小栗上野介ら実在した人物も登場する。

たなかさんは2001年に定年退職し、執筆活動を本格化させた。高崎での勤務が長かったこともあり、富岡製糸場が舞台の「奇妙な羽衣伝説」、七日市藩の薬事奉行を描いた「七日市藩和蘭薬記」（いずれも幻冬舎ルネッサンス刊）など、県内をモチーフとした作品を手がけてきた。

今作について、たなかさんは「横浜の成り立ちに、名もなき人々がかかわったことを描きたかった」と話している。四六判、320ページ。税別1600円。大手書店などで販売されている。